

[019] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10250>

出版情報：語文研究. 19, 1965-02-28. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

◇学会彙報◇

▼講義題目 昭和39年度第二学期

(大学院)	国語学演習(国語の変遷)	福田 教授
(大学院)	全 講義(概論)	全
(全)	全 演習(万葉集)	全
(全)	全 演習(平安時代の歌謡)	全
(全)	全 特殊講義(国語における存在表現)	春日助教
(全)	全 演習(小世継)	全
(学部)	全 講義(国語史序説)	全
(大学院)	国文学演習(芭蕉晩年の俳諧)	中村 教授
(大学院)	全 講義(近世小説史)	全
(学部)	全 演習(芭蕉七部集)	全
(大学院)	全 演習(江談抄研究)	今井助教
(学部)	全 演習(大和物語)	全
(全)	全 講義(紫式部研究)	全
(学部)	全 特殊講義(近代作家の研究)	重松助教
(大学院)	全 臨時講義(連歌と連歌師)	金子 講師

▼九大国語国文学会総会並びに研究発表会

昭和39年6月21日

研究発表

柳亭種彦の読本について
古今和歌六帖と千載佳句の部立

大土井政臣
清田 伸一

夢の文学
其角試考

福田 益和
石川 八朗

已然形に承接して反語を表はす「かも」
学としての国文学の客観性について
国語史の限界について

鶴 久
井手 恒雄
福田 良輔

総会決定事項

一、会則内規第一条第二項の変更。維持会員年六百元、通常会員年三百円を、維持会員年八百円、通常会員年四百円に改める。

(特輯号は製作・送料実費をもって別に誌費を定める)

一、会則第四条第一項の諒解事項として、物価の昂騰等のため語文研究の発行が困難なばあいは、幹事会の承認を得て、九大国語国文学会よりその経費として製作実費の一割以内に限り、補助することができると。

一、幹事の改選。新幹事を次の方々にお願ひすることになりました。

福岡 長敬一郎 畑茂 平井秀文 井手恒雄 鶴久 白石悌三
船津正明
関東 寺園司
関西 橋本元二郎
学生 石川八朗 迫野虔徳

懇親会

於 サツポロピヤホール

▼第十四回西日本国語国文学会

昭和39年10月24・25日

於 福岡女子大学

研究発表（本会会員の分のみ）

- 嶋田忠臣伝考 金原 理
 浄瑠璃絵展考 橘 英哲
 江戸末期長崎地方の動詞活用形式 篠崎 久躬
 露伴の仙書参同契について 瀬里 広明
 紫式部本名「香子」説への疑問 今井 源衛

▼新入会員歓迎会 昭和39年11月18日

本年度進入生十名を迎え、久山町猪野神社千人館で歓迎会。

▼卒業論文構想発表会 昭和39年11月28日 於 文学部演習室

▼会員消息

永井寛氏（昭和十七年卒業）は去る三十九年九月十五日逝去されました。ここに謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

第十八号正誤表	
頁	誤
段	正
63	下
1	のとみなされる。
64	頁上段一行目に移す

▼受贈図書 昭和39年5月〜12月

- 西鶴 古代語文ノート
 後撰和歌集歌語索引一―三
 医家先哲遺墨展覧目録
 横組みの字形に関する研究
 現代雜誌九十種の用語用字
 日本国語漢文略式及英文式考察一覧表
 続古板東海道「道中記」二種
 栄花物語人名索引
 こわれた羅針盤
 俳優を中心とした演劇の比較考察
 中世日本の思想と文芸
 桂宮本叢書22・23
 光厳天皇遺芳
 発展する朝鮮の言語学および文芸学
 天理大学稀書目録 和漢書二、三
 講座現代語二、三、五
 越前俳談提要
 近世文芸資料と考証三
 物語作家圈の研究

- 天理図書館
 福田 良輔
 今井 源衛
 羽倉 敬尚
 国立国語研究所
 国立国語研究所
 渡辺小弥太
 岸 得祇
 今井 源衛
 小宮 隆弘
 共立女子大学
 井手 恒雄
 宮内庁書陵部
 常照皇寺
 朝鮮大学校
 天理大学図書館
 春日 和男
 石川銀栄子
 七人社
 目加田さくを

つてなされねばならないと思われる。この小論が、その手順の一つにでもなり得たらと思うのである。

註一 操淨瑠璃「絵づくし本」致（操淨瑠璃の研究）所載。
註二 語文研究、第十五号。

受贈雑誌 昭和39年6月～12月（その二）

国語国文	5・7・12月	中世文芸	29	国文学致（広島大学）	33	35
国語と国文学	6～12月	近世文芸	10・11	国語学研究（東北大学）	7	4
国文学 解釈と教材の研究	6～12月	美夫君志	7	文化（東北大学）	28	1・2
国文学 解釈と鑑賞	6～12月	日本歌謡研究	創刊	東北大学文学部研究年報	52・53	46
文学	6～12月	万葉	52・53	文芸研究（東北大学）	30	48
日本文学（日本文学協会）	5～7月	文学・語学	30	文学会論集（甲南大学）	33	24
学苑（昭和女子大学）	6～12月	音声学会会報	116	文学研究（法政大学）	19	20
国学院雑誌	4～11月	能楽思潮	29	日本文学誌要（法政大学）	17	10
言語と文芸（東京教育大学）	5～9月	和歌文学研究	28	文芸と批評	29	3・4
日本学術会議月報	1・2月	訓点語と訓点資料	28	実践文学（実践女子大学）	22	23
文献ジャーナル	6～10・12月	日本学士院紀要	22の1	王朝文学（東洋大学）	3	10・11
ぐんしよ	6・11月	連歌俳諧研究	27	文学論藻（東洋大学）	27	28
八雲	5～12月	国語国文学（名古屋大学）	14・15	国語国文学（岐阜大学）	16	3
ひのくに	5～11月	女子大文学（大阪女子大学）	16	国語国文学報（愛知学芸大学）	33	18
白路	6～12月	女子大国文（京都女子大学）	33	人文論究（北海道学芸大学函館分校）	35	24
日米フォーラム	6～12月	国文学（関西大学）	36	人文研究（神奈川大学）	18	27
肇国	6・7・12月	語文（日本大学）	18	平安朝文学研究（早稲田大学）	18	10
国語学	56～58	国語研究（国学院大学）	18	国文学研究（早稲田大学）	30	10

主人公に藤原氏でなく源氏を選んだのは、権門藤原氏への反感のあらわれであり、しかも皇族最高の身分の女性も常に不幸に陥り、あるいは「姫君」の描写が常に平凡であるのは、その上流階級の女性に對する「冷徹な眼」を物語るもので、玉鬘の如き筑紫出のすくよかな女性に力を入れているところに、作者の好みが伺われるという。そしてここでも、結論的に、紫式部の憂愁が「己の才学を宮仕所に於いて十分に發揮できぬ不満」によるものと、前述の趣旨をくりかえしておられる。同じく第二節では「色好の否定」の題下に、紫式部は全篇中、一貫して、すぎすぎしい好色や不倫を斥けるが、それは、彼女が倫理的な漢文芸作家圏に属する人であったからだと主張される。第十章「漢文芸作家圏の系譜と行方」は古代諸記・武家

物・軍記物の流れを追って、氏の構想を概括されたものである。以上、本書のほとんど章題を紹介するのみで予定の紙数を費し果してしまった。私としては、大部の書ではあり、内容もまことに豊富であるから、多くの点で教えを受けると同時に、反面異論のある箇所も少くはない。また、たとえば、各敘述を、いますこし、学説史的展望の上に置いて頂けたら、氏の斬新な着眼や洞察がより一層際立って来たであろうにと、惜しまれる気もするし、全体に資料や本文の引用が、やや度を越していないかとも思う。然し、それは、ここに提起された問題の多様性と斬新さによって、補って余りがあるものである。氏の論をうけついで、発展せしめるのが、後学の義務とすべきであろう。紹介の趣旨に忠実であろうと期したあまりに、文字通り皮相のかいなでに終ったことを御許し願いたい。

(昭和三十九年七月二十日、武蔵野書院刊、七五〇〇円。)

▼受贈雜誌 昭和39年6月〜12月(その二)

国語国文研究(北海道大学)	28
国文学漢文学論叢(東京教育大学)	9
国文学論叢(竜谷大学)	11
国文(お茶の水女子大学)	21
論究日本文学(立命館大学)	23
立命館文学(立命館大学)	231
樟蔭国文学(大阪樟蔭女子大学)	2
成城文芸(成城大学)	37
和洋国文研究(和洋女子大学)	2
別大国文研究(別府大学)	5
薩摩路(鹿児島大学)	10
日本文学(東京女子大学)	23
人文科学科紀要(東京大学教養学部)	32
愛媛大学紀要(人文科学)	9
相模女子大学紀要	18
徳島大学文学芸紀要	18
山口大学文学会誌	15
山口女子短期大学研究報告	18
華(日本女性文学会誌)	4
郷土文化	79

223
 225
 227